第30回　セイタカアワダチソウ

セイタカアワダチソウは、秋の河北潟でいちばん目立つ植物です。見事な黄色い花が一面に拡がる様子を、わざわざ写真撮影に来る人もいます。すっかり日本の秋になじんでいるこの植物ですが、実は北アメリカ産の外来植物です。日本国内へは明治時代の末期に入ったようです。しかし、全国に急速に拡がったのは第二次世界大戦後に、アメリカ合衆国からの物資が入るようになってからともいわれています。細かい種子が風に乗って拡がり、いったん定着すると深く根を張り、地下茎から株で増えていき、アレロパシーと呼ばれる他の植物の種子の発芽を抑制する物質を生産します。

干拓が終わり干陸から農地造成期になり、だんだんと乾いていった河北潟干拓地に、このセイタカアワダソウが大量に繁茂したようです。そして、現在でも休耕地や堤防沿いに大群落を形成しています。肥沃な土地を好むということで、河北潟では高さは2mを超え、簡単には群落の中に分け入ることはできません。いったん純群落ができると、人だけでなく他の植物もなかなか入り込めません。

そうして、かつて全国的にこの植物の繁茂が問題となりましたが、地下にあった栄養分を使い果たしたり、また自ら放出したアレロパシー物質により自らも衰退してしまった結果、小さくなったり他の植物に置き換わったりした場所もあり、かつてほどは問題とはならなくなりました。しかし、外来生物法により要注意外来生物に指定されているほか、日本生態学会によって日本の侵略的外来種ワースト100にも選ばれています。

このセイタカアワダチソウ、河北潟ではまったく衰える気配がありません。河北潟はとんでもなく肥沃な土地のようです。花粉症アレルギーの犯人のように扱われていますが、本当は虫媒花で花粉を飛ばしたりはしません。濡れ衣を着せられながらも、ミツバチやハナアブの命を育んでいます。そんないいところもあるのですが、日本の昔の秋の風景であるススキやオギの銀色の群落を甦らせようと、セイタカアワダチソウの抜き取りの活動をおこなっています。しかし、いくら抜いても地下茎がちぎれて残ってしまい、なかなか絶えることがありません。せっかくですから、抜き取った植物を何とか利用しようと、紙に漉き込んだり、簾にしてみたりと活用の取り組みも始めています。河北潟自然再生まつりでは、毎年、セイタカアワダチソウ抜き取り大会を行っています。そうしたこともあって、会場のこなん水辺公園ではだんだんとセイタカアワダチソウが少なくなってきています。

（文　高橋　久）